

4章 保育の3つの工夫

環境の工夫（アイデアのたね）～地域特性を活かして～

地域特性や様々な人との交流など園の独自性を活かした、その園ならではの環境の工夫

「火山灰を集めて遊ぼう」～地域を身近に感じる～（5歳児）

学校法人鹿児島竜谷学園 和光幼稚園（鹿児島県）

保育者の工夫

大量の降灰に見舞われ、外での遊びも時々中断し、否応なく部屋での遊びになってしまう日々が続いた6月。屋上には大量の降灰が見られた。その降灰を取り除き、屋上でプール遊びの準備を5歳児に任せてみることにする。

重さを感じて



子どもの姿

- 屋上に積もった灰を集め、集めた灰の細かい粒子の感触を灰けむりの中で楽しむ。「フワフワしているね」「サラサラして気持ちがいいね」
- 舞い上がる灰のホコリに「煙みたい」
黄色いク灰袋に集めた子どもたちは、「重いね」とフワフワした手の感触とは違って、ずっしりとくる重さに耐えながら4人がかりで運ぶ。

灰の感触を味わう



- 「水を混ぜるとドロドロになるね」「ピチャピチャだー」「ドロドロだー！」「ヌルヌルになった」
などと言いながら、いつも砂場で味わっている砂の感触との違いを楽しむ。
- 「ほら溶けるよ」手からこぼれ落ちていく灰に「ドロドロしてたらお団子が作りにくいね」
すかさずドロドロの灰に、乾いた灰を降りかける。とすぐに固まる団子ができることを発見。
- 「お水が少ない方が固いのが作れるよ。ほら触ってみてね」
濡れた火山灰を触っている子が、「ハンバーグみたいだね」「お団子も作れるよ！」とサラサラの灰を混ぜての団子作りが始まった。
「砂場の砂で作っても割れやすかったけどさあ、ドロドロの灰に白砂（乾いた灰）をかけると団子ができるね」

砂との違いを感じる



団子にするために試す



- 「砂場のお団子よりおもしろいね」「すごく固いお団子ができた！！」と普段砂場で作っていたお団子と違いがあるということに気付いた様子。
- それから数日は、普段から遊んでいる砂場の砂や大好きな土山の黒土での団子作りに再挑戦してみる子どもたちの姿が見られた。
- 「黒土は水をかけるとそれだけで簡単に団子を作れる」
- 「砂場の砂も水を少し混ぜると団子ができる」
- 「灰は水を混ぜたらドロドロになるけど、サラサラ灰をかけるとすぐに固まる」
- 「黒土と灰のお団子は色も似ていて、どっちがどっちか分からなくなるくらい」
様々なことに気付く。その後、作ったお団子をしばらく置いておき、どのような変化ができるのか、子どもたちと確かめることにした。

＜考察＞火山灰を使った遊びをしていく中で、火山灰の特徴への気付きや発見に繋がっていった。

また、砂や土など他の素材との違いも感じていた。

降り積もった灰で遊ぶだけでなく、地域の自然を身近に感じる事ができたのではないかとと思われる。

ポイント

その地域・園だからこそできる環境の工夫があります。その環境を保育者が子どもたちの興味・関心を捉えて、保育に活かしていくことが大切です。この事例では、日常の砂遊びが豊かであることにより、火山灰という特有の教材が活かされ、工夫に繋がっています。地域との関わりを通して、豊かな発想が生まれたり、子どもなりに地域特性を知っていったりするなど「科学する心」が育まれることが期待できます。